ネパール北西部マナン紀行 —ヒマラヤで世界を語る—

森本 泉

MORIMOTO Izumi

I はじめに

ネパールはヒマラヤ山脈のほぼ南斜面に位置する内陸国である。筆者がネパール北西部、ヒマラヤにあるマナン Manān を初めて訪れたのは2007年のことであった。大学院に進学した時にネパール研究を志すことになり、以後カトマンドゥ Kathmaḍāu や地方都市を中心に、その他インフォーマントの出身村である中山間地や南部低地の村で調査を行ってきた。それまでヒマラヤは旅行客気分で行ったことはあっても、遙か遠くに仰ぎ見る存在であった。そんな遠い存在であったヒマラヤでの調査を考えるようになったのは、カトマンドゥで調査していた時に会った「マナンのグルン Gurun」と称する人々が語るライフストーリーに惹かれたからであった。国境を越えてバンコクや香港で「ビジネス」を展開してきた彼／彼女達の語りには、マナンという地名が頻繁に登場していた。マナンはネパールの中でも「遅れた」地域と考えられていたが、「マナンのグルン」といえばカトマンドゥでは裕福な人々というイメージをもたれている。裕福な人々の故郷と「遅れた」地域というこれらのイメージがいかに結びつくのか、実際に行ってこの目で確かめたかったのである。

筆者がヒマラヤに関心をもった理由はもう一つあった。ネパールの文化的多様性は標高による三区分、すなわちヒマラヤ、中山間地、南部低地に対応させて説明されることがあるが、ヒマラヤを知らなければネパール理解が皮相的なものにとどまるのではないかという不安があったのである。もちろん、ヒマラヤで少し調査したところでネパール理解が直ちに深まるものではない。逆に、ネパールにおけるヒマラヤを対象とした研究が、質的にも量的にも、歪んだネパール地域像を再／生産してきたとして批判されていることを考

えれば、ヒマラヤに興味を抱くこと自体が、ロマンティズムを含むまなざしでネパールを見ている証拠だとして批判に晒され得ることも自覚していた。このように考えねばならない問題はあるが、ヒマラヤを実際に歩くことで何か見えてくることがあるのではないかという楽観的な期待もあり、マナンで調査を行うことにした。前置きが長くなったが、ここでは筆者が2007年、2008年、2009年の三度にわたって訪れたマナンやその周辺で見聞したことを中心に、ヒマラヤの一隅で垣間見えた世界を提示したい¹⁾。

II ヒマラヤのイメージ・ネパールのイメージ

ガイドブックで紹介される典型的なネパールのイメージに、隔絶されたようなヒマラヤの山麓で、チベット仏教を信仰する人々が伝統文化を実践しながら暮らしているような秘境的なものがある。この背景に、ネパールが20世紀半ばまで西洋諸国に対して門戸を閉ざしていたことから情報が限られていたことと、開国と同時にネパールを訪れた登山家や探検家がヒマラヤを目指したことがある。秘境的なイメージに楽園イメージが上書きされたのは、1950年代以降、北に接するチベットに重ねられた楽園イメージ、シャングリラがネパールに移ってきたからであった（森本2012a）。

登山家や探検家が目指す場所は、通常到達困難な場所である。つまり、シャングリラという楽園イメージは、開発から取り残されたような「遅れた」地域イメージと表裏一体をなす。ヒマラヤに暮らす人々は、楽園に暮らす仙人でなければ、貧困や環境問題に直面する脆弱な人々であり、こうした状況は地球規模の課題として認識される。したがって楽園イメージに内包されるヒマラヤがネパール・イメージの構成要素とし

て強調されても、ネパールが世界最貧国に位置付けられている事実をもう一方で確認することになり、矛盾を感じることはないだろう。他方、近年カトマンドゥではシネコンやショッピングモールが開業し、人々の装いも世界中どこでも見られる既製服に変わり、普段着としてサリーを身にまとう女性を探す方が困難になっている。むしろこの現実には違和感を抱くかもしれない。

ネパールの北には雪に覆われたヒマラヤがそびえ、これと対照的に南にはゾウやサイが棲息する亜熱帯ジャングルが広がる。そして、その間にあるカトマンドゥでは、地球上のどこか俄かに判別できないような様相を呈する場所も出現している。このようなネパールの多様な状況がありながら、今もヒマラヤ・イメージが強調されるのは、ツーリズム現象と無関係ではない。しかし、トレッキング・登山を目的にネパールを訪れる旅行者は全体の10%程度にすぎない²⁾。旅行者にとって、ヒマラヤは足を運ぶ対象ではなく、遠くから眺めるものなのかもしれない。

III マナンへ通じる道一川を遡行する一

マナンはネパールの北西部に位置する郡で、東西に走るヒマラヤ山脈主稜の一つ、アンナプルナ

図1 マナンの位置

Annāpūrṇāの北面に位置する(図1)。マナン郡は東西二つに分けられ、マナン村は標高のより高い西部7村の中心となっている。「マナンの人々」とはこの西部7村を故地とする人々で、グルンという民族名を自称することが多い。この地域は、1960年代後半にネパール政府が川に架橋し、岩壁に通路を開削するまで、増水した川や雪が降り積もった峠に阻まれて通行困難になっていたため、他地域から「隔絶」されたイメージが重ねられてきた(Rogers 2004)。2007年から2009年当時、ネパールの都市部からこの地域に行くには、乾季で飛行機が運行すれば標高約3,300 mに位置するフンデHumde空港から歩くか(徒歩の所要時間は約3時間)、同様に約2,700 mのジョムソンJomsom(ムスタンMustān郡)空港から約5,400 mのトロン・ラThorong La(アンナプルナ北周の峠)を越えて下るか(同約2日間)、車道が通じている標高約800 mのベシサハールBesiāhar周辺から歩くか(同3~6日間)、いくつかの選択肢があった。

ところで、ネパールの村では、開発の指標に車道と電気の有無が取り上げられることが多い。開発をネパール語でビカスbikāsと言うが、「ここにはビカスが来ていない」と言えば、そこには車道や電線が通じていないことを意味する。当時、車道が通じていなかった郡はマナンをはじめいくつかあり、これらの郡はネパールの中でも特に「遅れた」地域と見なされていた。筆者が調査で訪れたのは夏休み期間で、雨季の最中であったことから、空路ではなくベシサハールまで車で行くことにした。車道にするための工事が年々進

図2 川を渡るバス
(2009年8月筆者撮影)

み、増水した川や、落石や倒木で行く手が阻まれ、乗り越えられない障害物に行き当たるまで車で進んだ。水深が浅ければ橋がなくても川を越えていくのである(図2)。トラックやバスの終着点であったベシサハールは、その先に暮らす人々の必需品が売られる市場になっていた。その沿道には食料や生活必需品を売る店、買い物に来る人々が利用する宿泊施設や食堂が軒を連ねていた。店に並ぶ商品が多様であれば、その地の暮らしが豊かになったかのように見えてくる。また、車道を通じれば移動時間が短縮され、歩かなくても移動でき、病院にも行きやすくなる。「ピカスが来ていない」地域に暮らす人々が、このようなピカスがやがて自分の村にもやってくることを期待していたのは言を俟たない。

ベシサハールの少し先で障害物に行き当たると、車を降りて歩き始める。緑に覆われた山肌のあちこちから水がほとばしり落ちてくるのが目に入る。山の湧水地からホースで水が引かれ、村人の生活に利用される。グラスで水を受けると白濁するが、しばらくすると透明になり、冷たくて大変美味しい。文字通りの天然水である。川の流れや、村人の取水方法を見ると、水は高きから低きに流れるというごく当たり前のこと

を再認識させられる。水の流れが急峻な山々を刻み、こうした流水を集めて川が大きくなっていく(図3)。マルシャンディ Marsyāndī 川に流れ込んだ水は、途中で取水されたり蒸発したりしなければ、ネパールの国境を越えてガンガー(ガンジス川) Gaṅgā に合流し、ベンガル湾へ流れ出ることになる。大地に刻まれた川に沿ってつけられた道は、人やロバに踏みしめられ、固められていく(図4)。これらの道は、段丘面や盆地に発達した集落を結び、幾重にも連なる山壁を越え、河道を離れてネパールの北に接するチベットまで続くものもある。

あちこちで道を車道にするために拡幅工事が進められていた。そのために岩壁に火薬を仕掛け、爆破する(図5)。雨季で地盤が緩み、沿道ではあちこちで土砂崩れが起き(図6)、そこに爆破の衝撃が加わって予期しない場所でも崩落が起きる。大きな岩盤が崩落すると、数日間通行止めになることもある(図7)。筆

図3 山を刻む川
(2007年8月筆者撮影)

図4 人やロバが通る道
(2008年9月筆者撮影)

図5 爆破後、落石がおさまるのを待つ
(2009年8月筆者撮影)

図6 沿道の土砂崩れ
(2007年8月筆者撮影)

図9 崩壊する氷河堆積物
(2007年8月筆者撮影)

図7 岩盤崩落
(2008年8月筆者撮影)

図10 韃靼蕎麦畑
(2007年8月筆者撮影)

図8 段々畑
(2007年8月筆者撮影)

者の眼には不便や危険に映る状況でも、カトマンドゥまで歩いて移動していた世代の「マナンの人々」は、だいぶ便利で安全に移動できるようになったと語る。

要所に鉄橋が設置されるようになり、雨季でも川を渡ることが容易になったからである。

標高が低い集落の周辺には耕地が広がる。緑で覆われた段々畑が尾根まで続き、谷筋などの急崖には広葉樹が茂る（図8）。

この景観はマナン郡に入る頃に変わる。標高が高くなると気温と湿度が下がり、風が肌を刺すように鋭く感じられるようになる。樹木が強風に煽られ薄い表土から剥ぎ取られ、その表土の下に礫を含んだ灰色っぽい氷河堆積物が姿を現し、表土と共に崩落していく（図9）。広葉樹にかわって針葉樹が増え、乾燥した山肌が現れる。耕作地自体が少なく、耕作放棄地も目立つ。畑で栽培される作物は大麦や^{だったん そぼ}韃靼蕎麦などの雑穀や、ジャガイモが多くなる。この地域の韃靼蕎麦は夏に赤い花を咲かせ、乾いた景観に彩りを添えている（図10）。韃靼蕎麦は石臼で挽いて粉にされ、火にか

図11 ガンガプルナ氷河
(2007年9月筆者撮影)

けた湯に入れて練り上げられ、おかずと一緒に食される。ベシサハールからロバで運び上げた米はカトマンドゥよりも高価になり、そうした米飯を食べることもあるが、雑穀が米飯にかわる主食となっている。雑穀はネパールの「遅れた」地域の食べ物とされてきたが、近年健康志向のネパールの裕福層が糖質の高い米飯の代わりに雑穀を食べるようになった（森本2012b）。日本のネパールレストランでも、韃靼蕎麦などの雑穀の粉を練ったものを伝統料理として供することがあるが、ネパールから運んできた雑穀であれば輸送代が加算されるためか、米飯よりも高い価格設定となっていることもある。

標高が上がるにつれて川の両側にある高峰が接近するようになり、やがて川の源流が見えてくる。水が流れてくる先に、氷河が横たわる（図11）。図11にあるガンガプルナ Gaṅgāpūrṇā 氷河の周辺は、凍てついて静まり返っているように見えるが、その先端に形成された氷河湖に近づくと、激しく流れる水の轟音が聞こえてくる。マナンの人々によると、50年ほど前には、氷河の先端に夏になるとできる小さな池がいくつかあったという。近年になってそれらが一つにつなが

図12 ガンガプルナ氷河の先端に形成された湖
(2008年8月筆者撮影)

図13 アンモナイトの化石
(2009年8月筆者撮影)

り、目に見えて拡大している。氷河が後退し、周辺のモレーンが崩壊していく。モレーン上の植物の成長度合いから、その過程が窺える（図12）。マナンの人々はこうした現象の要因である気温上昇を実感しているし、それが地球規模の課題になっていることも認識している。氷河の後退は水源の移動を随伴し、耕作放棄地の増加要因の一つになっている。移動した水源から水を引こうにも人口減少が著しく、灌漑施設を共同で作ることが困難になっている。氷河から流れ出る水量が増加する一方で、源流周辺でその水を使う人口は減少しているのだ。

マナンから隣郡のムスタンに抜ける道の最高所にある峠、トロン・ラは標高5,416 mに位置し、マナン郡を流れるマルシャンディ川と、ムスタン郡を流れるカリガンダキ Kālīgaṇḍakī 川の分水嶺となっている。両

河川上流の河原では、アンモナイトなどの海洋生物の化石が見つかることがある（図13）。これらは、ユーラシア大陸とインド亜大陸が衝突して隆起してできたヒマラヤの歴史を物語ってくれる。

IV マナンの人々—生業の変化—

ここでいうマナンの人々とは、主にマナン郡西部の7村を故地とする人々であり、「マナンのグルン」や「マナング」といった名称で知られている。マナンの人々は、チベット・ビルマ語系民族で、チベット仏教を信仰する人々である。それぞれの村に仏教寺院があり、寺院を中心に集落が広がる。村の随所に宗教的建造物が設けられ、村人によって修復され、維持されてきた。村を越えたマナンに対するアイデンティティをも共有するが、マナンの人々の村ごとの結束も強い。こう書くと、IIで述べたシャングリラ・イメージが彷彿として想像されるかもしれない。しかし、前章で見てきたマナンに至る交通インフラや自然環境を考えれば、厳しい生活環境が窺えよう。

マナンの中心であるマナン村は、マルシャンディ川を見下ろす段丘上にある（図14）。河川沿いに畑が広がり、集落周辺の斜面にも段々畑が広がる。赤く色づいているのは韃靼蕎麦の花であり、この他ジャガイモや大麦が栽培されていた。更に標高の高い場所でヤクが放牧されている。マナン村に限らず、マナンのようなヒマラヤでは、農業と牧畜が行われてきた。マナンでは、これらに加えて、古くから交易も行われてきた。交易と言っても、北に接するチベットとの岩塩交易を独占的に行ってきたムスタンの人々と違い、北インドや東南アジアへヒマラヤ物産（麝香やユキヒョウなどの動物や、薬草などの植物に由来する商品）を携えて出かけて売り、東南アジアから宝石・原石をインドやネパールに輸入するというものであった。こうした交易によって農業と牧畜の不足分が補われてきた。かつて、マナンからビルマの国境に接するインドのミゾラム Mijoram まで1カ月かけて歩き、ルビーやサファイヤ、翡翠の「ビジネス」に従事する人々もいた。ただし、この時の宝石・原石の「ビジネス」は、第二次世界大戦中に日本軍が進軍してきたことによって中断されたという。

図14 マナン村の概観
（2007年8月筆者撮影）

1950年代になると当時の水上交通の拠点であったカルカッタに活動拠点を移し、蒸気船に乗り換えて東南アジアへ行くようになった。1960年にはタイのバンコクから国際線が就航するようになり、今度はバンコクに拠点を移し、交易圏を拡大していった。この頃、ネパールから骨董品を持ち出し、東南アジアで生産される合成皮革や衣料をネパールに輸入していた。彼／彼女達がネパールにおいて「企業家集団」として知られるようになったのは、この1960年代以降、東・東南アジアで国際貿易を行うようになってからであった（Zivetz 1992）。

マナンの人々が国境を越えて交易をしてきた背景に、インドがイギリスに植民地化されていた歴史も関係している。マナンの人々の主たる交易先は、インドの他はビルマやマレーシア、シンガポール、香港であった。今の若者の祖父の世代には、グルカ兵（イギリス軍に雇われたネパール人の傭兵）と日本軍が戦ったインパールに行き、そこに残されていた銃やロープ、軍服、靴などをマナンに持ち帰った人もいたという。ネパールでパスポートが一般に発行される以前は、インドのパスポートを手に入れてから各地に出かけるマナンの人々も多かった。インドのパスポートがあれば、シンガポールや香港、マレーシアに行くことが容易であった。

マナンの人々が「企業家集団」として成功するようになったのは、1960年代の後半に当時の国王マヘンドラがヘリコプターでマナンを訪れ、「遅れた」地域の人々のためにマナンの人々に貿易特権を付与したこ

図15 崩壊する家屋
(2007年9月筆者撮影)

とも大きい。マナンの人々のマヘンドラ国王に対する敬愛の念は今でも篤く、マヘンドラがマナンを訪問した時には国王が歩く場所に絨毯を敷いて迎え、女性達が踊りを披露したといった思い出話も複数人から聞かせてもらった。国王から貿易特権を与えられたマナンの人々は、バンコクを拠点にして空路で東南アジアに移動し、貿易を展開するようになった。そのため、ネパール唯一の国際空港があるカトマンドゥに移住するようになった。このことは、交易・貿易が、農業や牧畜の補填ではなく、主たる生業になったことを意味する。

一方、ネパールでマナンの人々が「企業家」として知られるようになるのと反比例するように、マナン西部の人口減少が進んだ。センサスによると、1971年に5,810人であったのが1991年には1,849人にまで落ち込んだ。2001年には政情不安を背景に統計上5,534人にまで激増したが、2011年には再び2,222人に減少している。公的な統計上では人口が減少したり増加したりしているが、朽ちかけた家屋が増加している村の景観から、過疎化が進んでいることは否めない(図15)。他方、1980年代以降、トレッキングブームがアンナプルナ周辺にも及び、マナンにもトレッカーが現

れるようになると、ロッジやホテルが開業されるようになった。かつてはマナンの人々が「ビジネス」機会を求めて外へ出かけていたのが、マナンに「ビジネス」機会が到来するようになったのである(Morimoto and Chapagain 2014)。マナン村の入り口にはホテル街が形成され、カトマンドゥで暮らしていたマナンの人々の中には、マナンでホテルを開業する者もあらわれるようになった。また、マナンの人々はカトマンドゥでもホテルを開業するようになっており、比較的規模が大きく、近代的な施設が彼／彼女達のホテルを特徴づけていた(森本2012a)。この背景に、ネパールにおいて1990年に民主化が達成されて経済が自由化され、その結果国際貿易を特権的に行ってきたマナンの人々の地位が相対的に低下し、他産業を開拓する必要に迫られていたことがあった。こうして観光産業がマナンの人々の「ビジネス」の一つに加わっていった。

一般のネパール人よりも早くから交易を通じて外国経験を積んできたマナンの人々にとって、新しい産業である観光産業への参入は、さまざまな意味で有利であった。マナンで1977年に自宅を改装してロッジを開業したMさんは、1973年に東南アジアに「ビジネス」に行き、タイのバンコクやパタヤ・ビーチで外国人に工芸品や宝飾品を引き売りした経験があった。彼は約20年前にマナンで村長を務め、マナンにおいて鉄橋を35カ所架橋する計画と現在進行中の車道工事計画を立案し、地元の灌漑や植林、教育の普及にも尽力してきた。政府による開発はなかなか届かず、その計画の多くは国内外のNGOから支援を受けて実施し、これらのことが評価されて、現在でもマナンの有力者として認められている。Mさんが1981年にトロン・フェディ Throng Phediに開業したロッジは、マナン村から歩いて一日の距離にあり、アンナプルナ一周コースに来るトレッカーがトロン・ラを越える前に必ず泊まらなければならない地点にある。標高4,500 mにあるそのロッジの周辺には集落がなく、トレッカーの増加とともに経営は拡大し、2009年時点で150人を収容できる規模になっていた。また、ニュージーランドから援助を受けて、ロッジの前を流れる川に20 kWの小型水力発電所を設置した。発電所の管理人に給料を払うが、電気代はかからない。ロッ

ジには、アンテナがないのでビデオ再生用だがテレビがあり、筆者が訪ねた時に日本のTBSテレビが制作したMさんが出演しているユキヒョウのドキュメンタリー番組を見せてくれた。マナンで撮影したものだという。その番組制作がきっかけで、1989年にMさんは東京に行く機会を得た。日本に行く時には友達に服を借りたという。馬鹿みたいに忙しく働く日本人に呆れ、原宿や新宿では鶏冠^{とさか}のように髪を立てた子ども達を見て面白く思ったそうだ。ロッジにある電化製品はテレビの他、照明や暖房、調理道具など、水力発電の電気で賄われる（薪も若干使用するが）。電熱コンロや日本製の電子レンジ、イタリア製の大型電気オーブンが厨房に並ぶ。電化製品やガラスのように壊れやすい物は人の背に乗せて運ばれる。トレッキング・シーズンが始まる前に、30頭近いロバの背に食料などの必需品をくくりつけ、マナンと市場を30回から35回往復するという。かつてはベシサハールからロバで8日間かけて運んでいたが、2008年にムクティナートまで車道が開通してからは、標高5,416mのトロン・ラを越えてこれもロバで1日で運べるようになった。宿泊客向けにパンやパスタ、ピザなどがそこで作られて提供されるが、Mさんは雑穀の粉を練ったものを食べる。村人が雑穀を食べる様子に、外国人は「熊がものを食べているのを見るように」物珍し気なまなざしを向けるのだそうだ。

マナンでは、道中襲われないようにライフル銃を背負って馬に乗ったMさんが、トロン・フェディで支払われる宿代を袋に詰めてロバの背中にくくりつけ、地方都市の銀行まで運んでいるといううわさを耳にした。村で成功者として認められるMさんは、交易・貿易に加えてホテル産業を手掛け、村長も兼任しながら地域の発展に尽くしてきた。Mさんの息子はムスタンへ中国商品を買付けに馬に乗って出かけ、娘はタイへ衣料品を買付けに飛び、カトマンドウのショッピングモールでそれらを販売している。また別の息子はアメリカ合衆国に留学し、そこに定住するかもしれないという。家族が国境を越えて分散し、それぞれの生業をもつのは、リスク分散を図っているようにも見える。

V 広がるマナン

マナンは、外部からは「隔絶」され「遅れた」地域とみなされてきたが、他のネパール人に先駆けて国境を越えて「ビジネス」を展開してきた「企業家集団」を生み出した地域でもある。その要因となったのは、農業と牧畜では人口を養えない厳しい自然環境であった。他地域に生産手段を求めねばならなかったからである。同時に、他者が容易に近づけない場所でもあ

図16 カトマンドウに建立された大仏
(2014年10月筆者撮影)

図17 仏陀公園に創られた集落のミニチュア
(2014年10月筆者撮影)

たことから、外部からの介入が少なく人々の紐帯が強化され、この紐帯が村を離れた人々を繋ぎ、移動を容易にしてきた。水が高きから低きに流れるように、マナンの人々はヒマラヤの川沿いを下り、時には道を変え、広がっていった。やがて交易部門で家族を養えるようになると、土地という生産手段から離れ、その時の生業に便利な場所に移住するようになった。その過程の一つの側面がマナンの過疎化である。

マナンが過疎化する一方で、カトマンドゥでは、マナンの人々が集い、儀礼を行う寺院をはじめとした宗教施設や公園などが建造された(図16)。ネパール最古の仏教寺院に隣接して建立された大仏と仏陀公園は、マナンの人々が、宗教に関係なく誰にでも開放された憩いの場にすることを目指し、資金を調達し、建造したものである。ヒマラヤに抱かれ、仏教寺院を中心に広がる村を模したミニチュアは(図17)、シャングリラ・イメージを彷彿とさせるような景観を呈し、彼／彼女達のマナンのイメージを具現化したものと考えられよう。マナンで起きている事案(村のインフラ整備など)もカトマンドゥで決定されるという今日、マナンの人々が多く居住しているカトマンドゥにマナンの世界が出現したのである。

マナンの人々の拠点は、ネパール国外にも広がっている。筆者がバンコクで会ったマナンのグルン、Hさんは、1980年代にバンコクで「ビジネス」を始めたが、台湾やチュニジアに拠点を移し、一旦帰国して1990年代に上述の大仏建立事業に従事した。その後、再びバンコクに戻り、装飾品の「ビジネス」を始めた。Hさんは、マナンの人々が交易・貿易で成功したのはマヘンドラ国王(当時)による特権付与のお陰と語る。その元国王が1960年代後半にマナンを訪れた契機をつくったのは、1960年代にバンコクのインド人街でマヘンドラが会ったマナンの人々の存在であったと指摘する。2013年の時点で、バンコクにはマナンの人々が25~30人定住し、そこを拠点に運び屋をしているのは70~100人に上るという。Hさんに「ビジネス」の手ほどきをした叔父もタイの女性と結婚して現地に定住しており、別の叔父はビルマに住んでいる。また別の叔父はバンコクとカトマンドゥを往復しながら「ビジネス」をしている。東南アジアに住んでいる親族や、ダージリンの寄宿学校に預けている

子ども達とは、休みや祭りの折にカトマンドゥやバンコクなどの移動経路の拠点のどこかで会う。マナンという故地で結ばれた人々の世界は、国境を越え、世代を越えて広がっているのである。

マナンにも最近、車道が開通した。乾季で道路状況が良ければ、カトマンドゥから一日でマナンまで到達できる。村人にとって物資の調達が容易になり、外部とのアクセスも時間が短縮され、暮らしも移動も楽になる。外部から訪れる人口が増加すれば「ビジネス」機会が創出され、マナンに戻る人も増えて過疎化が緩和されるかもしれない。こうした利点は誰もが挙げるが、筆者が訪れた時の村人の最大の関心事は、外部からの人口流入に対する不安であった。つまり、外部からのアクセスを阻んできた自然の要塞が取り除かれた時、マナンにあった彼／彼女達が管理してきた時間や空間が変えられてしまうことへの危惧であった。隣のムスタン郡のムクティナート Muktināth まで一足先に車道が開通した時、道中の宿や食堂からトレッカーが消え、車道の終着点が激変したことを見聞かしている村人達は、1週間かかったトレッキングの行程が1日に短縮される結果を具体的に予見していた。車の速度に合わせて生業・生活を変えていかざるを得なくなる。上述してきたように政府によるビカスがなかなか届かなければ、自ら積極的に国内外のNGOによる援助を導入し、インフラ整備を行ってきた。屋上にソーラーパネルを設置して照明を電化したり、蓄電器にテレビを繋いでビデオを見たり、セーターではなく軽くて洗濯が容易なフリースを好んで着る。変化することが嫌なのではなく、自分達で変化を取捨選択できなくなること、換言すると外部から変化が否応なく押し寄せてくることを危惧しているのである。

マナンが外部からアクセス困難なヒマラヤの「遅れた」地域に見えていたことは、マナンの人々がマナンの時空間を管理することを可能にしていたと考えられる。マナンの人々にとって自然の要塞となっていた環境が車道によって突破可能になった時、マナンの人々の世界はどのように変わるのであろうか。

注

- 1) 科学研究費による若手研究(B)(課題番号19720220, 2007~2009年)「ネパール西部ヒマラ

ヤ地域における人口動態とその影響に関する研究」(研究代表者: 森本泉)を実施するために、2007年、2008年、2009年にマナンで現地調査を行った。

- 2) http://www.tourism.gov.np/downloadfile/Nepal%20Tourism%20statistic_Final-2016_1498990228.pdf
(最終閲覧日: 2018年5月1日)

文 献

森本 泉 2012a. 『ネパールにおけるツーリズム空間の

創出——カトマンドゥから描く地域像』古今書院。

森本 泉 2012b. ダルバートから考えるネパールの風土. 松本 淳・横山 智・荒木一視編著『モン・スーンアジアのフードと風土』187-203. 明石書店。

Morimoto, I. and Chapagain, P. S. 2014. Entrepreneurship in the peripheral regions: A case of tourism in the Himalayan village Manang. *Nepal, International & Regional Studies, Meiji Gakuin University* 46: 1-18.

Rogers, C. 2004. *Secrets of Manang: The story behind the phenomenal rise of Nepal's famed business community*. Kathmandu: Mandala Publications.

Zivetz, L. 1992. *Private enterprise and the state in modern Nepal*. Madras: Oxford University Press.

〈著者略歴〉

森本 泉 (もりもと いずみ)

1970年千葉県生まれ。明治学院大学国際学部教授。博士(社会科学・お茶の水女子大学)。主な著書に『ネパールにおけるツーリズム空間の創出——カトマンドゥから描く地域像』(2012年、古今書院)等がある。